
オフ会のジャンヌダルク

由一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オフ会のジャンヌダルク

【Nコード】

N5281Z

【作者名】

由一

【あらすじ】

現世に転生したジャンヌ＝ダルクは、ひきこもりを引退（？）し遂に自分のブログのオフ会に参加することになった。果たして会は上手くいくのだろうか？ ジル＝ド＝レイの正体は如何に？ 初の複数話構成。

大須への進軍

私は、ジャンヌ・ダルク。

かつて裏切りの炎によって焼かれた私だったが、数百年後の時を経て日本人「十字 まもり」に生まれ変わってはや１９年になる。

以前は人間にほぼ完全失望にきつていて、学校も行かず、ずっと家にひきこもっていた私だったが、１年ほど前にパソコンで始めたブログが大繁盛し、間接的にはあるが交流を持つようになった。色々な問題も起こったが、ブログの訪問者数は増え、遂にこの度オフ会を開く事になった。

知らない人のために説明するが、「オフ会」と言うのは、ネット上のみでの交流だった仲間達が実際に顔を合わせ、食事会等の交流をすることである。どんな感じなのかは、私も今回が初めてなのでわからないが、オフ会が盛り上がるかどうかは今回のオフ会を主催したジル・ド・レイの腕にかかっているだろう。勿論、私も会のメインに据えられるわけなので、ただ黙って食事を食べ続けるだけとはいかないだろうが。

とにかく人と会うのも久しぶりな上に、まったく未知の世界だ。目的の場所、大須に向う私は不安と期待が入り混じっていた。

鶴舞駅のあたりから続く長い坂を歩いて行く。外の景色すら久しぶりだ。太陽が眩しい。

オルレアンにいたころの太陽とは、何かが違うように見える。同じものはずなのに、いやに弱弱しく感じる。太陽は、私がない

間に何か困った事でもあったのだろうか？ 私の眠っていた間に、多くのものが目まぐるしく変わってしまった。そして、それについて説明してくれる神の声は存在しない。私は、ただそんな世の中に翻弄されるのを拒んで、籠の鳥となっていた。そんな私が今、遂に籠を飛びだして生暖かいコンクリートの地面の上に立っている。これは、正しき事なのだろうか？

使った事もほとんど無い携帯電話を覗き見ると、表示される時計は3時45分をさしていた。

開始まで十分に時間はある。私は、ゆっくりとその坂を登って行った。

いざ玉野屋（前書き）

オフ会会場へ向かうジャンヌⅡダルク（十字 まもり）。
メンバーは果たして集まっているのだろうか？

いざ玉野屋

ぶらぶら大須を歩く事20分。

玉野屋は大須観音の近くのちょっと目立たない場所にあった。料亭の様な、なかなか古風な建物だった。かなり昔からあるのだろう。

信楽焼か何かの、大きな狸の置き物が私を出迎えた。

果たして、本当にここで良いのだろうか？

不安だった。本当に、ブログに来てくれる皆は来てくれるのだろうか？

もし、ジルドレイ誰も来てくれなかったら、私は未来永劫人間を信用するのはやめにしたい。一生、家の中でひきこもってでもいようかと思う。

入口は手動だった。

私は、何か重苦しい、まるで決戦前夜のような感覚でガラガラとその扉を横にスライドさせる。

思わず瞑ってしまった目を開ける。

玄関は、人気が無かった。しかし、すぐにトタトタと足音が聞こえてきた。

「いらっしやいませ」

出てきたのは4〜50代の女性だった。

この店の女将さんか何かだろう。着物姿でちょっと威厳がある。まあ、ナポレオンが称賛したと言ったの私の威厳程では無いと思うが。

「えーと、お名前は？」

女将さんは優しくに名前を聞く。普通なら、今の名前を言うものだろうが、オフ会なのでそうはいかないのだ。現世の名前を言うわけにはいかない。だから、答えは勿論こうだ。

「……ジャンヌ・ダルクです」

言うしかなかった。明らかに変だけと言わざるを得ない。

神より賜りし神聖な名前なのだが、ここで言つと恥ずかしいのはなぜだろう？

恥じる事はない。恥じる事は無いはずなのに。おお……申し訳ありません守護天使様。このような私を見ておいでなら随分とお嘆きの事でしょう。

「ああ、くら・ピュセルを愛する会の方ですね！ どうぞこちらへ。」

私は啞然とした。

この女将さんは、私の名前にもC O S P Oで買ったアニメチックな衣装にも動じず、爽やかに私を部屋に案内するではないか。これには、まことに驚いた。少しばかり感心してしまった。悠然と私の前を歩く様もまた、どこか優雅だ。

案内された部屋は「十五夜」という名前だった。

お座敷で、座布団と机がおおよそ30人分程の為に並べられてい

た。そして、その机の一つに既に座って何かメモの様なものを見ている男性がいる。

多分、彼だろう。彼に違いない。

私は、やや硬い動きでその男性に近づくと、彼はさっとその場で立ちあがった。

ジル＝ド＝レイ（前書き）

オフ会会場に辿り着いたジャンヌ。
先に来ていた1人の男性に近づく……

ジル＝ド＝レイ

「こんにちは！ あなたは、もしや……」

「えっと、ああ……私が、ジャンヌ＝ダルクだ」

即座に気付くとは、さすが私も美処女或いは美少女だ。

まだ転生前の威厳も残っているのなら少なからず喜ばしい。しかし、そんな気持ちは表に出す事はしない。まずは、この男の素性を知らねばならない。

「君がジル＝ド＝レイか？」

「はい。お久しゅう、ジャンヌ様。昔と変わらずお美しいですな。」

「

変わらない事は無いと思う。いや、容姿は前世よりも上だと思う。それはさておき、この男の容姿だが……まあ、わかり易く言うと、相方が女子ボクシングを始めた、多人数アイドルグループ大好き、ナレーションもよくやるメガネの太ましいお笑い芸人にそっくりである。この男が本当にあのジルであるのなら、正直なところ転生に失敗したと言っただろう。しかし、本人の前でそんな事を言うのは失礼だから言うまい。それに、私は、顔で人を差別したりするほど器量の小さい人間では無い。平等に向き合うのが主義だ。冷静に肝心なところを確かめよう。

「まだ、君の事を信じたわけでは無い。君があのだらば、この問いに答えよ。本当にそうなら、きつと答えられるはずだ」

「はい、仰せのままに」

彼は騎士の様なポーズをとったが、まったく似合わない。

そもそも、何故にこんなキノコみたいな髪型にしているのだろうか？ 似合っていると思っているのか、それとも大きい顔を小さく見せるためか？ オルレアンにも似たような髪型の男はいたがあれはある程度流行していたからだ……色々と頭の中で詮索してしまうが勿論聞く事は無い。今はこの言葉を発して正否を確かめるのみだ。

「では、聞こう。ラバテラの花の香りは……？」

「我らの神鳴を神明呼びさまし、栄華の道を切り開く」

男は、迷いなく答えた。

かつて、戦の時にほんの一部で使っていた呼応式暗号を彼は正確に答えたのだ。

「……なるほど。どうやら、嘘ではなさそうだな。ジル」

「おわかりいただけただようで安心しました」

私達は手を取り合う。

はためからみたらコスプレ美少女と、お笑い芸人が語り合っている妙な光景なのだろうが、幸いまだ誰も来ていない。

「よもや、あなたが転生されているとは思いませんでした。再び会う事が出来て光栄にございます」

「お互い、変わったな。ジル」

ジルは本当に大きく変わった。まさに月とスッポン、ヴィーナスと紫式部だ。

昔は、なかなかヒゲの似合う男だった。今はやけに肌がツルツルテカテカしている。二ヒルな雰囲気は変わらないが、見た目と完全にミスマッチであり、動きや言動が全てショートコントのネタのように見えてしまうのが複雑である。ただ、勿論、それを笑ったりはない。そもそも、私はお笑い番組等でウケることはほとんどない芸人泣かせな人間なのだ。ちゃんとジルと分かった以上、昔の様に接する。

「君は、どうやって転生したのだ？　もしや、錬金術か？」

「おお、お詳しいようすな。ジャンヌ様」

「まあな。伊達にひきこもっていたわけではない」

「おお、流石は。そうです、私は錬金術によってこの世に転生いたしました。方法を言いますと長くなるので今は伏せておきますが……危険な賭けではありませんが、何とか成功したのですよ。ジャンヌ様は、一体どのような方法で？」

「わからぬよ。気がつけばこの体だったのだ。おそらくは、大いなる神によるものだと思うのだが……何も聞こえないのだ。あの頃聞こえた天の声が聞こえない。だから、今となってはただ、昔聞いた神の言葉を語ることしかできんよ。」

「むづ……なるほど。やはり、そうですね。」

「なんだ？　君は、何か知っているのか？」

「ええ、あなたとコンタクトをとったのはそこにもあるのですから」

「話してくれ。一体君は、私に……」

「ああ、この話は会の後にしましょう。他の人が来ましたよ」

そう言われて私は背を向ける。

いくつかの軋む足音が聞こえてきた。

そして、会が始まる（前書き）

ジル＝ド＝レイが本物であると確認したジャンヌ。
ほかのメンバーも次々とやってくる。

そして、会は始まる

会の始まる時間が近づくにつれ、少しずつこの部屋「十五夜」には人が増えて行った。

ひとまず、私はホツと胸を撫で下ろした。これだけ来てくれれば十分だ。

それにしても、予想外だったのはその面子の見た目だ。

最初、私はほとんどが20〜30代の若い男性ばかりかと思っていたのだが、以外にも年齢層は広く、女の子からおじいさんまでいる。私は、人を見抜く力には自信があったのだが、ネット上の発言から、その人間の素性を的確に推理することは残念ながら出来なかったようだ。そもそも、ジルがキノコおじさんだった時点で全く見抜けていない。ちよつと悔しい。

みんな次々と、ジルの名簿にハンドルネーム（ネットの中での名前の事）を言って、好きな席に座っていく。私は、それを正座しながらろくに挨拶もせず無言で見っていた。バレているかもしれないとは思いながらも、今はまだ1人の参加者を装っていた。

そして、はじまりの午後6時になった時には、席のほとんどは埋まっていた。

オフ会としても十分な集まりと言えそうだ。

時間が来たと分かるや否や、ジルは部屋の隅に立つ。
いよいよ開会なのだろう。皆の席には料理が置かれ、コップには
飲み物が注がれた。

「えー、皆さま改めましてこんばんは！ 本日は「ラ・ピュセル
を愛する会」にお集まりくださいまして誠にありがとうございます。
私が、今回のオフ会を企画させていただきましたジル「ド」レイで
ごす！ ジャンヌさんのブログにはいつもお世話になっております
！ 本日は司会進行を務めさせていただきますので、皆さま応援ヨ
ロシクお願いいたします！ 盛り上げて行きましょう！」

会場から、大きな拍手が起こる。歓声も少し起こった。
はじまりの言葉としてはまあまあといったところだろう。

「では、まず最初にブログの管理人であり今回の会の中心的存在
であるジャンヌさんにご挨拶を頂き乾杯の音頭を頂きたいと思
います。」

ええっ！？

私が最初なのか？ みんなが自己紹介した後では無くて私が最初
なのか？

「さあ、お願いします。」

「……」

私は、しぶしぶ席を立った。

視線はみんな私の方を向く。体が震える、心臓が高鳴る、妙に緊張する。

ひきこもりが長かったせいか、こういう状況に体も心もついて行かない感じた。

いや、何を言っているのだ私は？

私はかつて大軍を率いたあのジャンヌダルクだぞ？

数千数万の兵の前で快活に言葉を発したのを忘れたのか？

おおよそ30人。たかが30人だぞ。何を恐れる事があるか。

大丈夫だ。大丈夫。この程度どうということはない！

私は、きつと目に力を入れた。

そして、ゆつくりと川の流れの如く神に頂いた麗しき口を開く。

「みなさん、お集まりいただき、ありがとうございます。私が、くら・ピュセルの管理者、ジャンヌダルクです。沢山の方が、当ブログに来ていただいている事、まことにうれしく思っています。おかげで最近は、人間というものに再び期待感を持つようになってきました。コメントも、いつも有難く拝見させていただいております。返事に拙い部分があるかもしれませんが、大変感謝していると云う事がわかっていただけると幸いです。オフ会と言うものは初めてですが、今日はお互い、良い会にしましょう。では、大いなる神に対して、この会を開く事が出来た事に対して……ええと、乾杯！」

「かんぱーい！」

皆、コップを天高く掲げ、次にそれを他の人のコップに当てて鳴らす。

チリンと良い音が室内にこだました。

私はそれを聞いて、かつて戦いに勝った時の祝杯を思い出し、懐かしく思った。

ドキドキ自己紹介、私は傍観するのみ（前書き）

ジャンヌの、乾杯の音頭はなんとか上手く行った。
続いてメンバーの自己紹介に移る。

ドキドキ自己紹介、私は傍観するのみ、

「ありがとうございました！」

乾杯が終わると再びジルが司会を続ける。

さて、それぞれの飲みっぷりだが、一気に飲んだ人もいれば、ちよつとだけ口に付けただけの消極的な人もいて様々だった。こう言う所にも人間性は現れると思う。かく言う私は、炭酸の強いコーラを少しだけ飲んで、やめた。かつて戦いを共にした男たちは酒飲みの豪快な者が多かったが、それは国柄と言うものもあるかもしれない。それよりもまず、アルコールを飲んでいる人がこの会場にはほとんどいない。九州ならば結構な酒豪がいると言うが、どうやらそうだった人間はいなさそうだ。ここは中部地方だしな。まあ、未成年の私がこんな飲酒の事を考えているのは常識的に考えれば妙な話だと思うが、考えてしまったのだから仕様が無い。

「さて、それでは次に皆さんの自己紹介に移りたいと思います。そちらから順に自己紹介をお願い致します！ 名前は、ハンドルネームで結構です。」

ジルの手は、1人の気弱そうな男性に向けられた。

皆の視線に押されて、20代の髪の長い細身の男性は、まごまごして立ち上がる。

自己紹介って言うのが好きな人間って言うのはあんまりいないだろう、特に、自分に自信の無い人間にとっては苦痛だ。自分の事など語りたくないのに、こういった初対面の状況で語らなければならぬ。そこにはまるで、魔女裁判にかけられ、晒される無実の乙女

に繋がる哀れみを感じてしまう。しかし、今の私はただ、彼の声に耳を傾けるのみだ。

「あ、あの……<暗黒開闢魔王ルシファス>です……三重県から来ました。今日は、よろしくお願いします。」

なぬ!?

彼がああ、威勢のいい挑発的発言を連発するルシファスだということか!?

これは、驚いた。まったく、豹変とはこういう事を言うのだろうか。いつもは長いコメントを書き込むのだが、こと実際の自己紹介となると、言葉少なくあっさりと着席した。しかし、そのギャップを覚悟してここに来た勇氣は認めたい。良く頑張ったと、私は拍手を送った。

彼が出だした事で安心したのだろうか?

以降の自己紹介は、割とリラックスした感じになって行った。それにしても、みんな全然イメージと違う。<FOX>は、腰の曲がったお爺さんだし、<ドクター・くわ松>は医者じゃなくてIT関連の仕事してるらしいし、<メガネざる>は視力1.5だし、<ミルフィー>はムキムキのヘラクレスみたいな男だし、<Yシャツ君>はタートルネック着てるし、<なのつぺ大好き>は真面目そうなお坊さんだし、<やれ男>は、いつも3枚目をやっているがヤニーズ事務所寸前のイケメンだった。とりあえず、そんな彼らに私は心から拍手を送り続ける。勿論、他のメンバーも拍手を欠かさなかった。

「……ありがとうございます。では、次の方。」

「はい。」

そして半分くらいが終わった時、ある女の子の参加者の番になった。

私程では無いと思うが、なかなか可愛い顔をしている。栗色の髪の毛はすらりと長く綺麗だ。明らかに良い意味で浮いている。こんな子が、あのブログに来ていたのは意外だ。彼女っぽいコメントを残す人間は<ミルフィー>くらいしか思い当たらないのだが、ミルフィーは前述の通りだ。一体誰なのだろう？

「こんにちは。ええと、私は、<ぱくりまく朗>ですっ！坂^{さか}祝市^{ほぎ}からきました！みんなと会えてとっても嬉しいです。今日は楽しくオフ会したので、よろしく願いします！」

なんと！

彼女が、あの<ぱくりまく朗>だったとは。

本日一番の驚きである。私は、思わず強く拍手してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5281z/>

オフ会のジャンヌダルク

2011年12月21日13時57分発行